
サンクトペテルブルクの夜明けー世話焼き男子の願い

榛名屋 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サンクトペテルブルクの夜明け―世話焼き男子の願い

【Nコード】

N8495N

【作者名】

榛名屋 忍

【あらすじ】

「堂々乙女と秘密の美女」「堂々美女と下僕男子」「堂々美女と世話焼き男子」の続編。佳恋からの告白の返事もしないまま、ロシアのサンクトペテルブルクで新しい生活を始めることになった桐原悟。居場所のわからない悟を想いながらモデルの仕事に励む栖川佳恋。再び二人を事件が襲う。

サントペルブルクの朝（前書き）

読者の皆様へ

この作品には未成年者の飲酒・喫煙のシーンが登場しますが、未成年者の飲酒・喫煙は法律で禁止されています。筆者は未成年者の飲酒・喫煙を認めているわけではありません。また、設定上リストカットという言葉が登場しますが、筆者はこのような行為を認めているわけではありません。また、この作品には一部暴力的なシーンも含まれています。

詳細な描写はしておりませんが、不快に思われる方がいらっしゃるかもしれないので、前書きとして書かせて頂きました。問題なければ続けて本文をお読みください。

サントペテルブルクの朝

サントペテルブルクの朝。俺は荷物も解かないまま、寮のベッドに横たわっていた。俺の名前は桐原悟。日本の大学から転学してきた。突然電話が鳴る。相手はよく知っている人物だ。

「久しぶりだね、母さん」

「着いたなら、顔を出しなさい」

「そうだね、ごめん。疲れたんだよ」

母はこの大学で教員をしている建築学の専門家だ。

「皆さんに伝えないまま来たんですって？お父さんは怒っていらしてよ」

”皆さん”というのは俺が心を許せる数少ない友人。栖川佳恋、栖川優、神楽鈴音の三人だ。特に日本を代表するモデル・栖川佳恋は一応俺の彼女、ということになっていた。けれど、こんな俺に釣り合う存在じゃない。

「それでいい、それでいいんだよ…」

俺は勝手に電話を切った。もう一眠りしてからにしよう。母とはずっと離れて暮らしていたから、俺に友人というものができて、癖になっていたリストカットが少しばかりおさまったというだけで大変お喜ぶのだ。

これから、俺はこの地で、三人と決別して暮らすのだ。俺は本当は三人と一緒にいてはいけない存在だった。わかっていたのに、甘えていた。

俺はカーテンの隙間から漏れる光に少し安心した。これで眠れる、そう思ったから。

短い再会

昼過ぎに目を覚まして、俺は教授室のある建物に向かった。休みだから学内には人影が少ない。部屋の扉をノックをすると「パジャールスタ（どうぞ）」と声がした。

「失礼します」

日本語で返しても通じる相手だ。ドアを開くと特に驚いた様子もなくこちらを向いている。

「あら、久しぶりね、悟」

母は立ち上がり、手を差し出した。堅い握手を交わす。

「まあ、座って」

そこには豪勢な応接セットが用意されていた。この教授室のある建物はかなり歴史があるもののようだから、その雰囲気壊さないように考えて家具を揃えているのだろう。元々はこんな趣味じゃない。

「銃で脅されたって、本当なの？」

「まだ傷残ってるかなあ。見ます？」

俺が腕まくりをしようとしたら、母は首を振った。

「いらないわ。で、あなたは何をしに来たの？」

すでに母は本題に入りたがっているようだった。

「この大学に、ですか？」

「そうよ。突然転学したいだなんて言い出して。」

「環境を変えたかった、ただそれだけです」

「まあ何でもいいわ。あなたはロシア語ができるもの。困ることはないでしょう。好きなようにやりなさい。」

母は席を立った。話は終わったようだ。

「では、失礼します」

いつもこんな具合で、母は聞きたいことだけ聞いて、終わると仕事に戻ってしまう。悪いと言つつもりはないのだが、こちらとして

は面白くない。

寮に戻ると事務室にいた寮長に声をかけられた。しかも、それは日本語だった。

「君、桐原くんだね。桐原教授のご子息の。」

「は、はい」

「寮長の茂木です。どうぞよろしく」

茂木はにこやかに手を差し出した。

「よろしく願います」

教員に日本人を起用する親日的な大学だ。他に日本人がいても不思議ではない。

「日本との違いに不安を感じることもあるだろう。そんなときは僕ら寮のスタッフに声をかけてくれ」

「ありがとうございます」

母がいるからさほど不安ではないのだが、大学生活を円滑にするには寮での振る舞いも重要だ。早く慣れなければ。

「それから、今日は寮の歓迎会だから、君も参加するといい。君以外にも新入生がいるからね」

「わかりました」

俺は寮長と別れ、部屋に戻った。いい加減荷物を解いたほうがいいだろう。とは言ってもたいした荷物はない。細かなものはこちらで買い揃えるつもりだったからだ。とりあえず歓迎会に使うスーツを出してみた。歓迎会までの時間、街へ出ることも考えたが、時間の余裕のある明日以降でもいいだろう。ひとり、部屋でのんびりと過ごすことにした。

あたらしい仕事

「カレンちゃん、今日も可愛いね」

「ありがとうございます!!」

私は深々と頭を下げた。私はモデルの栖川佳恋。相手は有名ファッション誌の編集長だ。私を一年間表紙のモデルに起用し、来年も契約を更新してくれるという話になっている。競争の激しいモデル業界で生き抜いていくためには、特に重要な仕事だ。

「そうだ、カレンちゃんにお知らせがあるんだけど」

「はい、何でしょうか？」

「実は、カレンちゃんを起用してから売り上げ倍増って感じてね。今度、カレンちゃんの写真集をうちの出版社から出してもらおうと思ってるんだけど…」

「写真集?!」

私は驚いた。私はただのファッションモデルで、雑誌とファッションショーの仕事くらいしかしたことがなかった。

「う、売れるんですか…?」

「もちろん!うちの社内で盛り上がっちゃってるんだから。で、撮影場所は外国が良いと思うんだけど、どこがいいかな?」

編集長はやる気満々だ。私はただ驚いてしまって、質問にも答えられないでいた。おろおろしていると、ふと目に入っただのはマトリョーシカ。誰が持ってきたのか、机の上に置いてある。

「ロ、ロシアなんてどうでしょう?」

「ロシアかー。いいねー。南の島とか、ありきたりだもんね。よし、スケジュール合わせてみるね」

編集長は意気揚々と去っていった。私はため息をついた。

本当は笑ってなんか居られない。大切な人ー悟くんがいなくなつて一週間。せめて手がかりが欲しい。無事でいるか知りたい。それ

でも待つと決めた以上は、仕事で手を抜くわけにはいかなかった。

「…ちゃん、カレンちゃん」

誰かの声がした。いけない、と振り返ると編集長が頭をかいていた。

「ごめんねー。スケジュールなんだけど明日から三日間なら押さえられるって話で、急だけどお願いできるかなあ」

「え、明日からですか?!」

「そうなんだよー。カレンちゃん人気者だからね。今度またファッションショーに出るんでしょ。そのリハーサルとか立て込んでるらしくて。発売日から逆算しても、明日からの三日間を逃すわけにはいかないんだよね」

隣でマネージャーが目を光らせている。ゴーサインだ。

「わかりました。よろしくお願いします!!」

私は編集長の手を取った。

「場所はモスクワとサンクトペテルブルクで調整しておくよ。宮殿や教会：観光名所がたくさんあるからね。」

こうして、私のロシア行きが決まった。弟・優に頼んで荷物をまとめてもらい、その日のうちに空港近くのホテルへ向かった。

サントペテルブルクの夜

寮の歓迎会は食堂で行われた。周りはほぼロシア人だ。外国人なんて俺くらいじゃないか。少し尻込みをしていたが、気さくなロシア人学生たちは俺の胸の名札を見て話しかけてきた。もちろんすべてロシア語だ。

「キリハラって、もしかして、キリハラ先生の息子？」

「そうだよ」

「あのキリハラ先生に家族がいたのか。知らなかったよ。」

「サトルも建築をやってるのか？」

どうやら母のおかげで話題には事欠かないようである。俺は楽しい時間を過ごしていた。数人の先輩からはアルコールを勧められた。嗜み程度の量ならいいだろう。ロシア人は酒好きが多いようだし、コミュニケーションツールになる。酒には強いほうだから、と安心して受け取った。

しばらくして、酔いが回ってきた。少し強い酒だったか？そんな気はしなかったけれど……。そして俺の意識はいつの間にか途切れていた。

「キリハラのヤツ、寝ちまったのか」

「日本人は酒に弱いつていうからな」

悟の周りを囲む学生たちに気づいて寮長の茂木が声をかけた。

「慣れない土地に来て、疲れていたのかもしれないね。部屋に連れて行ってあげなさい」

「わかりました、寮長」

学生たちは悟を部屋に運ぶとベッドに横たわせ、静かに戸を閉めた。部屋の鍵をかけ、寮長のもとへ戻る。

「キリハラの部屋の鍵、事務室で預かってください」

「わかった、ありがとう」

深夜、悟の部屋の戸が開いた。彼はゆっくりとベッドに近づき、持っていたタバコに火をつけた。そして、そのタバコを部屋に放ると黙って部屋を出ていった。

……呼吸が苦しいのは、なぜだ？布団に絡まりもがいている。つまり俺はベッドの上に居るのだ。力を振り絞り立ち上がろうとするが、身体からは力が抜けていくばかりだ。うっすらと開いた目には大量の煙が見えた。そして、再び視界は真っ暗になった。

薄闇のサンクトペテルブルクにて

学生たちは鳴り響く非常ベルで目を覚ました。寮長の茂木は奔走していた。火事が発生したのだ。

「早く外に出なさい！早く！」

着の身着のまま部屋を飛び出していく学生たちの波を遡るように、茂木は逃げ遅れた学生がいないか確かめていた。だんだんと煙は強くなり、到着した消防隊員が静止する。

「この先は私たちが」

「待ってくれ。まだ学生がいるんだ。俺は寮長としての責任がある」

「落ち着きなさい。あと何人だ」

煙の中を走ってきた学生が叫んだ。

「キリハラの部屋から煙が出てるぞ」

「そのキリハラっていう学生が逃げ遅れているのかもしれないな」

消防隊員は煙の中へと消えていった。

やがて火は消し止められ、早朝の大学本部には桐原有希子教授の姿があった。寮で起きた火事について事情を聞きたいと呼び出されたのだ。

「君の息子は寝タバコの癖があるのか？」

「いえ、その、息子は確かに煙草を吸うことはありますが…」

「火事の原因はタバコじゃないかと消防隊員が言っていたぞ。君の息子はベッドのそばで倒れていたそうだ。」

「息子は今…」

「煙は吸ったらしいが、問題ないそうだ。念のため病院に行って診てもらうことにはなったが」

「そうですか」

早朝のサンクトペテルブルクの街に佳恋は居た。朝日に照らされ

た歴史ある大学の講堂前で撮影をする、という予定になっていたのだ。しかし、夜の明けぬうちからサイレンが鳴り響き、不安なまま向かった大学の前には人だかりが出来ていた。通訳の女性が火事が起きたらしい、と告げた。

「これじゃあ撮影は無理そうね。」

「そうですね。別の場所に行きましょう。」

カメラマンは荷物をまとめて車に乗り込もうとした。その時、一人の女性が野次馬をかき分けて現れた。その女性に向かって若者たちが声を上げた。佳恋は耳を疑った。その中に「キリハラ」「サトル」という言葉が聞こえたのだ。空耳だったのかもしれない。けれど、佳恋はその偶然に賭けてみたかった。

佳恋は通訳に頼んで、その日本人らしき女性を呼び止めた。

「すみません、桐原悟さんを御存知ですか？」

ロシア語で問いかけたが、返答は日本語だった。

「息子のことを知っているの？」

「私、栖川佳恋といいます。悟さんにはいつもお世話になっていて

…」

「そう…私は悟の母で桐原有希子といいます。この大学の教員です。」

有希子は深く頭を下げた。

「あの、大学で何が？」

佳恋はもう一つ気になっていることを尋ねた。

「学生寮で火事が起きて…どうも息子が部屋でタバコを吸ったらしいの。それが原因で。」

佳恋は息を飲んだ。悟くんは怪我はないのか。

「今、悟さんは…？」

「病院にいるわ。軽いやけどだそうよ。これから迎えに行くけれど」「私も同行させてください。」

有希子は目を丸くした。

「あなたは、もしかして……。いいわ。一緒に行きましょう。」
カメラマンを置いて佳恋はタクシーに乗り込んだ。仕事よりも今は悟のことで頭がいっぱいだったのだ。

暴かれた過去

「落ち着いたかい？」

病院のそばにある公園のベンチに腰掛けて、寮長の茂木は悟に話しかけた。処置が済んで病院から出てきた悟を茂木が迎えたのだった。

「はい。わざわざ迎えに来ていただいたありがとうございます。」

「寝タバコなんて危険だよ。あとから警察の方にも事情を聞かれると思うけれど。」

「すみません、何も覚えてなくて…。みなさんにご迷惑をかけて、本当に申し訳ないです。」

悟は気になっていた。スーツケースにタバコやライターが入っていないかったはずだ。それなのになぜ、自分は煙草を吸うことができたのだろう。酔って記憶のない間に誰かからもらったのか。

「あーあ。ほんとうに迷惑な話だよ。どうせなら死んでくれたほうが良かったのに。」

「えっ…寮長さん？」

茂木の言葉は悟の想像の範囲を超えていた。

「君は何も知らないんだね。本当に迷惑なやつだよ。」

茂木が持っていたのは悟にとってはすでに見慣れてしまったといつてもいい、黒い物体―拳銃だった。

「とりあえず付いてきてくれるかな？話さなきゃいけないことがあるんだ。」

今抵抗しても無駄だろう。火事の件で警察に捕まるだけだ。悟は抵抗せず茂木の車に乗り込んだ。

「確かにここにいたのよね？」

有希子は病院の受付で叫んでいた。佳恋にはロシア語はわからなかったが、何を話しているのかは大体予想できた。悟はすでに病院を出ていてどこに居るかわからない、ということらしいのだ。

「誰か迎えに来ていたの？」

「はい。黒髪の男性が、玄関で待っていましたよ。大学の関係の方では？」

「ありがとう。」

有希子はイライラした様子で病院を出た。

病院を出ると警官が二人を取り囲んだ。その表情は困惑に近いものだった。

「桐原教授、ご子息は誘拐されたかもしれません」

「えっ？どういうこと？」

「その公園で散歩中の女性から、少年が脅されて車に載せられていくのを見た、通報があつたんですよ。どうやらそれは教授のご子息のようなのです」

有希子が倒れそうになるのを佳恋がとっさに支えた。

「一体どうなっているのよ。あの子は。日本でも誘拐されたつていうじゃない。しかも銃で脅されて……。あの子は気にしてなかったけど、私、心配で。今度は一体何が……」

目隠しをされた状態で車に乗せられた俺は、気づいたときには街の郊外へと移動していたようだ。具体的にどこなのかはわからない。抵抗はしてみたものの簡単に手足を縛られ、口までガムテープで塞がれて、自由を奪われてしまった俺は、廃墟の薄暗い一室でただ茂木の独り語りを聞いていた。

「君の母親、有希子と僕は婚約していたんだ。君のお父さんは、僕から婚約者を奪ったんだよ。」

茂木はタバコを吸った。明け方の火事は茂木が起こしたのだ、と容易に想像がついた。

「ある日、突然桐原が言ったんだ。有希子との結婚を取りやめて欲しいと。桐原と僕は大学の同期で、サークルも一緒だったから、そんな裏切りは信じられなかった。」

次に茂木が耳元で囁いた言葉に俺は驚いた。

「理由は子どもができたから、さ」

ガムテープ越しでは曇った音にしかならなかったが、俺は声をあげた。

「驚いたか？だよな。お前のせいで僕らの人生は狂ってしまったんだから」

茂木は「僕らの」と言った。つまり、父も、母も、俺という存在がなかったら結婚することがなかったということなのか？俺は混乱した。ただでさえ薄暗い部屋で恐怖を感じているところだ。パニックを起こしてしまわないかとヒヤヒヤしていた。

だが、パニックを起こす前に茂木が動き出した。茂木は立ち上がると、俺の腹部に繰り返し蹴りを入れた。

「お前さえいなければ…お前さえ…」

それから何時間が経過したのかわからない。すっかり部屋は暗くなっていた。初めは抵抗を試みたが、手足を縛られていてはどうしようもなかった。痛いと感じているのかわからないほどに殴られ、蹴られている。意識が飛びそうになるのに眠れない。パニックを起こす暇すら与えない。

しばらくして、茂木は俺を縛っていたロープをほどき、ガムテープも外した。

「わかっただろ、お前は両親に愛されてない。だから離れて暮らしてるんだよ」

俺が何も言わず俯いていると、茂木は襟元をつかんだ。

「何か言ってみろよ」

「…聞いたことなかったから…」

「隠してたんだろ、桐原のヤツが」

「そう、なのか…」

痛みをこらえて声を絞り出す。茂木はなぜか笑みを浮かべていた。「楽になっただろうだ？どうせ要らない子どもなんだから」

取り出したのは小さなナイフだった。どこに隠し持っていたのだろう。床にそれを放り投げて、茂木は俺に背を向けた。ずっと手が震えている。自傷は、あの人のためにやめると誓ったのだ。俺は必死に耐えていた。

「やらないなら手伝ってやるよ」

気がついた時には茂木が拳銃を握っていた。銃を向けられるのは二度目だ。今度こそ危ない、と思ってとっさに目を瞑っていた。

銃声の代わりに窓ガラスが割れる音がした。

「悟！」

叫んだのは母だった。茂木が存在など気にもとめず、駆け寄って俺を抱きしめた。

「悟：よかった…」

「ホント…に？」

「悟？」

「俺は…いらな…」

そこで意識は途切れた。

「やはりあなたが…」

「有希子、その子さえいなければ僕らは結ばれたのに」

「…涼介、それは違うわ」

「何が違うんだよ。そんな奴、生きてる意味無いだろ。僕らの人生を狂わせるだけだ」

「違う。この子は私たちの大切な息子よ。あなたに殺させはしない」

「大切？何で？」

「涼介、私と桐原さんはずっと付き合ってたのよ」

「嘘だ」

「嘘じゃないわ。だからこそその子は産まれたの」

警官たちが入ってくるのを見て、茂木は銃を発砲し、逃走を図った。警官たちは茂木を取り逃がしたようだ。有希子にはそんなこと

はもう関係なかった。
「ごめんね、悟」

黒い影の襲来

これで何回目だろう。目が覚めると病院にいる。どうしてなのか、だいたいは理解していた。寮長の茂木に監禁されて、そこに母がやってきた。それから、たぶん、救出されたということなのだろう。痛む身体を少し動かすと、憔悴しきった様子の母が椅子に腰掛けていた。

「母さん」

「悟……？」

「俺は……知らない子だったのかなあ？」

俺は茂木の言葉を思い出していた。母は茂木の婚約者だった。もし本当にそうなら、俺は母にとって邪魔な存在だったのかもしれない。

「俺が生まれて、母さんは苦しんだ？」

「落ち着きなさい、悟」

わかっていて。自分の体がまた震えていること。パニックを起こしかかっていること。涙を流していること。それでも知りたかった。「本当は、どうなの？」

聞き覚えのある震えた声に、身体がとっさに動いていた。開けるなど言われていたドアを開ける。

「悟くん」

声にベッドの上の悟がこちらを向いた。

「え、佳恋さん……」

悟の顔が青ざめている。

「来ないで、俺は、もう、」

そんな言葉は無視するだけだった。母親に握られた右手。空いた左手をとって、ぎゅっと握る。

「よかった、もう一度会えて」

「佳恋さん、でも、俺は」

「いいの。悟くんがどうだっていいの。」

安心するというよりは観念するといった様子で、悟は目を瞑った。
「まだ傷は痛むの？」

ゆっくりと悟は頷いた。小さく手を動かしただけで顔を歪める。
「何も思い出さなくていいよ。何も考えなくていい。真実がどうであれ」

言い終えたとき、有希子が口を開いた。

「まさか、真実はそんなものじゃないわ。あんな一方的なストーリーの言葉。」

「ストーリー？」

「だから、悟が生まれて、お父さんと結婚できて、私は良かったのよ。あの人がどうなのかは知らないけれど。」

私は控えめに笑顔を作って病室を出た。携帯電話が鳴っていた。

「茂木涼介はMOGI貿易の次期社長だそうです。小さい頃は母親から虐待を受けていたそうですね…」

「さすが鈴ちゃん、情報が早いわね」

病院に着く前にメールをして茂木のことを調べてもらっていたのだ。

「MOGI貿易は特にロシアとの関係が深いので、茂木涼介もロシアにいたのでしょう」

「大手貿易会社の息子を、有希子さんは振ったわけね」

「プライドが相当傷ついたんでしょうね」

「それで悟くんを恨んで暴力を…」

事情は把握した。ますます私は怒りを募らせた。

「悟くんを探してまたあんなこと…しないわよね」

「わかりません。MOGI貿易の力も強大ですから、悟くんを探すのは簡単だと思いますよ」

「どうしよう…」

「警護なら私が手配します」

鈴音は電話の向こうで胸をはっていた。

「あ、ありがとう、鈴ちゃん」

「当然なのです。悟さんには恩返しをしなくてはなりませんからね」

母は大学当局に電話をしに行った。火事の件も真犯人が茂木だと警察が発表していた。俺は一度日本に帰国することに決めた。まだ茂木が見つからないのだ。ロシア国内に留まることは危険、ということだ。病室でテレビに目をやっていると、突然ドアが開いた。サングラスをかけた男が立っていた。

「茂木…さん？」

「何、あの警護。適当なもんだね」

「なぜここに？」

「決まってるじゃん。桐原悟を殺しに来たんだよ」

あの時持っていたのと同じナイフだ。

「ストーカーなんですよ」

「誰がそんなことを」

「母さん」

「有希子が？桐原に脅されているんだよ」

茂木はへらへらと笑っていた。

「母さんはあんたのことを恋人だとも思ったことがないって」

そこに釘をさすと茂木の表情は一変した。ナイフをこちらに向けて一気に振りかざす。俺はベッドから降りるのに苦戦した。点滴が邪魔をするのだ。ようやく降りたときに扉が開いた。そこに立っていたのは佳恋さんだった。

茂木はナイフを持ったまま振り向いて、佳恋さん目掛けて勢いよく飛び出した。俺は裸足のまま駆けだしていた。夢中だった。茂木より先に佳恋さんの身体を掴んだ直後、布の切れる音がした。茂木は佳恋さんを刺すつもりでナイフを突き出したのだ。俺の左腕に軽い痛みが走る。

「佳恋さん、危ない、逃げて！」

「悟くんを置いていくわけにいかないわ」

「そこを通さないって言うなら、あんたのこと殺すよ」

茂木が行っても佳恋さんは退かなかった。

「それで退くと思ったの？」

「君は知り合いでもないし、殺すのは容易いよ」

自己満足に浸った茂木に隙を見つけるのはもっと容易かった。俺はもう我慢の限界を超えていた。

「うぜえんだよ。いい加減黙れ！」

茂木がこちらを向いた瞬間、ナイフは簡単に奪いされた。

「悟、落ち着きなさい」

それは佳恋さんの後ろに隠れていた男―親父の発した声だった。

「茂木くんとは私が話しあう。」

「要らねえよ！つーか、何で来てるんだよ！」

「茂木くんとの間にしこりを残したのは私だからね。鈴音くんに話は聞いた。とりあえずケガの手当をしてもらいなさい」

「必要無い」

「悟、無茶を言うな」

「俺が無茶な性格してんのは、あんたが一番よくわかってるだろ。もう我慢の限界だ」

俺は茂木の胸ぐらをつかんだ。

「俺はテメエに殺されるのも、母さんがテメエみたいなのに振り回されるのもゴメンだ。そんなに俺に死んで欲しいんなら、テメエの前で死んでやるよ。けど、それでテメエは満足か？」

「五月蠅い！君さえ、居なければ……」

茂木はゆつくりと床に座り込んだ。

「君さえ……」

「ふざけんな！テメエの思い通りにはならねえよ！」

佳恋は拳を振りかざそうとする悟を止めた。

「やめよう、ね」

悟はしばらくしてから力を抜き、病室を後にした。

新たな船出

「落ち着いた？」

俺は佳恋さんと病院のカフェテリアでコーヒーを飲んでいた。

「少し」

両親と茂木は病室で話し合いの最中だ。

「痛みは？」

腕にはわずかにナイフの傷が付いていたが、むしろそれよりも茂木に殴られたり蹴られたりした場所が痣になっていて痛い。

「最悪です」

ぶっきらぼうにしか答えられない。まだ怒りは収まっていないのだ。

「ねえ、もしかしてあの日もそうだった？」

「あの日？」

「悟くんがまだ高校生の頃、あの病院で」

「ああ」

俺は少し可笑しくて笑ってしまった。

「パニックは、パニックかもしれないませんが、研修医を殴りましたね」

「やっぱり」

佳恋さんもようやく優しい顔になった。

「君はそういう人なんだよね。熱いんだよ」

その時だった。ヘリが病院のヘリポートに着陸した。しかし動き出したのは医師たちではない。スーツ姿の偉そうな奴らだ。

「何かしら」

佳恋さんが視線を遠くへやる。

「あれは・・・」

それは二人の見覚えのある人間の姿だった。

「悟さん！」

駆け寄ってきたのは鈴音だった。勢い良く俺に抱きついた。
「うわっ」

「もう、家族を失うのは嫌なんです。悟さんが…危険だって聞いて…不安で…」

とりあえずそつと肩に手をおいてやる。

「悪かったな、心配かけて」

「本当に良かった…」

佳恋は一步後ろに下がって、二人の姿を眺めていた。

「鈴ちゃん、警護まで手配してくれるって言ってたのよ」

「結果として間に合いませんでしたが…」

「いや、ほんとうにありがとう」

しばらくすると佳恋さんはむすっとした表情をし始めた。

「どうしたんですか？」

「あのね、悟くんは私のこと女性として見てる？」

「な、何を言ってるんですか？」

俺は鈴音を座らせ、佳恋さんのそばに寄った。

「だって、悟くんだったら自分から私の手を取ったことないでしょう？」

「それは…」

うつむくとますます佳恋さんが語気を強める。

「恥ずかしいなら別に良いんだけど、もしかして私のこと女性として見てないのになって思ってる」

「まさか、そんなこと」

「鈴ちゃんの手なら握るくせに」

「それは…」

確かにそうなのだ。今、俺は鈴音のことには気にせず触れていたのだ。佳恋さんが怒るのも無理はない。

「俺は怖いんです。佳恋さんと自分は釣り合わないから」

「誰が決めたのよ、そんなこと」

「自分ですけど…」

「私は釣り合わないなんて思っただけだよ。そんなこと思う必要ないって」

「俺はもつと強くなりたくて、そう思ってロシアに来たけど、結局トラブルだけ作ってしまった…」

「三人と一緒にいてはいけない。そう思ってロシアに来たものの、結局力を借りてしまった。俺は情けなかった。」

「今はそばにいてくれるだけでいいの。特別なことは望んでないわ」

「私も、悟さんには日本に帰ってきてもらいたいです」

佳恋さんに続けて鈴音も声を上げた。

「俺は、甘えていいんでしょうか？」

「いいんじゃないかな」

そう言ったのは優だった。鈴音に同行していたのだ。

「僕も、もどってきてもらいたいと思ってる。姉さんの側にいて欲しいし、鈴音のことも支えて欲しいし。もちろん、僕の親友だから」

「ありがと…優…」

茂木は警察に引き渡され、俺は両親も連れて日本へ帰国することになった。転学の話もないものとされた。次期社長候補が逮捕されたMOG I貿易は社長のコメントを発表し、桐原家へ向けて公式に謝罪した。しかし、この報道で日本中に桐原悟の名前が知れ渡ったことで、悟のもとには報道陣が群がるようになっていた。

「モデルの佳恋さんとお付き合いをしているそうですが」

「佳恋さんと同棲中なんですか？」

ノーコメントを貫いているが何時まで続けていられるのか。苦悩は始まったばかりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8495n/>

サンクトペテルブルクの夜明けー世話焼き男子の願い

2010年10月8日12時12分発行